『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題　七

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題六」（愛知県立大学文学部論集　国文学科編　第五四号　平成一八年三月発行）につづくものである。

凡例

一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。

二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。

1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。

2、丁付けは省いた。

3、曲中に付した〈・シテ・アト・――等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（）で括って示した。

4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。
　　七七→喜　厂・鳫→雁　〆→シメ　ゟ→より
6、宛字も多くみられるが、そのままとした。
　　竹類（畜類）　御行所（御教書）　字文（呪文）

翻刻

和泉流秘書　七冊之内五

目録

麻生　首引　蝸牛　人ヲ馬
成上がり　目近　真奪　鬼瓦
腰祈り　水懸聟　杭か人か　花折り
地蔵舞　鞍馬参り　鈍根草　骨皮
蟹山伏　鶏聟　子盗人　布施無経
墨塗り　竹生嶋参り　竹の子

麻生

シテ　信濃の国の住人麻生の何某永ミ在京致所に訴訟こと〳〵く相叶安堵之御行所頂戴致新地を過分に拝領し其上御暇迄も被下た　先のさ者を呼出し悦せうと存ル　ヤイ〳〵藤六下六有か　両人ハア引　シテアルカ引　両人ハア引　シテ居たか　藤六両人の者　両人御前に　シテ汝等呼出ス別の事て無イ　永ミ在京する所ニ訴訟こと〳〵く相叶安堵の御行所頂戴し新地をかつと拝領したか何と目出度事てハ無ゐか　藤六是ハ御目出度存升　下六御目出度存升ス　シテまだ悦す事か有　藤六夫ハ何やふの事て御座り升　シ其上御暇迄被下たか嬉敷ハ思はぬか　両人重ね〳〵御目出度存升ス　シテ扨明日ハ元日てハ無イか　両人左様て御座り升　シテ御暇を被下た事なれハ早速国元江下らふ但シ明日の出仕をも勤めふか　藤六御国許に御座らせられても御登り被成て御勤被成そふな物て御座る　まして爰許ニ御出被成る事なれは御勤被成たらは能御座りませう　ナア下六　下六藤六か申通て御座る　シテいかにも汝等か言通ちや　乍去小袖上下の用意か無ゐ　トヲ夫ハ用意致て置ました　シテ何ちや用意した　トヲ左様て御座る　シテ夫ハ出来いた　さりなから烏帽子も入　下是ハ又私か用意致て置ました　シテ汝か用意した　下左様て御座る　シテ出来した〳〵　まづ烏帽子を見せい　下まだ烏帽子屋ニ御さる　シテ烏帽子屋ニ有物か何の役に立物ちや　下今日出来筈て御座る　シテ早う取て来い　下畏て御さる　トヲ急て行しませ　下心得た　ト言テ後見座へ入也　楽屋へ入も有り　シテ扨烏帽子髪ハ誰に結せうそ　トヲ夫ハ私か稽古致て置ました　シテ夫ハ一段ちやいかふ隙の入物と聞た今から結て置う　トヲ能御座りませう　シテ急て拵へをせい　トヲ畏て御座る　ト言テ大小ノ前へ行キヨウリセンヲ持出ル　シテ利根な者を遣へは　ト言内に藤六キヨウリセンヲ主ノ前へ持て行主刀ニ手ヲカケル　シテこりや何と

する（藤六ア□サカル）　きうりせんて御座る　何きうりせんちや　きうりせんと申て是をぬりませねはごたいか付ませぬ　夫成らはそふと言わいて手ころな木を持て懸るニ依てよい肝をつふいた塗いて叶わすハ急てぬれ　畏て御座る（ト言テヌルナル）　御断申筈で御座つたに磴と失念を致ました（ト言テ左ノ手ヲ懸かてサカヤキノ内ヲぬる主ウツムキイル）　急て髪を結へ　心得ました（ト言テ後見座へ入カツラ桶ふたニトキグシ元ゆひコタイツケ入レ持て出ルシテノソハニテ下ニ居フタ下ニ置コタイ付ニブウ〳〵トフキカケル主見テ）扨能御座り升ス　ヤイ〳〵　ハア　夫ハ何ちや　あい塩と申てか様にいたさねはこたいか付ませぬ　あい塩はアイ塩ちやかちとむさい気味ちやナア　いつれ奇麗にハ御座りませぬ　サア〳〵是へ来て結へ　心得ました（ソハエヨリカミトク）　夫ハ出来いた　扨小袖の模様ハ何ちや　先下ニハ白むく御熨斗目ハ花色に子持筋を織付させました　御上下ハかちんにむら千鳥をちらしに致ました　何村千鳥ちや（ト言テ両方ヘノク藤六少シアトヘノキ）　花色熨斗目ハ取合かよかろふわゐやい　左様て御座り升ス　サア〳〵結へ　心得ました　扨明日の祝儀は如何様に祝ふ（ママ）出そ　先熨斗に昆布勝栗御雑煮のうへてかん酒の引渡して御さる　何かん酒の引渡しちや（ト言テ両方ヘノク主イキツル藤六腹ヲタテ正面ヘノキイル）　ヤイ〳〵藤六　ハア　それまてか　左様て御さる（トシカ〳〵アリ）　未明から出る事なれハ其分てハ成まい　かんのまん〳〵としすまして大かわらけて二三盃ひつかけて出よふと思ふ　夫は如何程なり共御心任せて御座る　何心任ちや　左様て御さる　サア〳〵結へ　心得ました　扨〳〵隙入而きやうくつな物ちやナア　御尤て御座れ共今暫て御さる御かんにん被成ませ　本国へ居たらは取立て取らしやうそ　成程心得ました　扨よふ御座有ふ存升る　扨〳〵汝ハ調法な事を覚た　迚もの事に念を入て結て呉い　夫ハ難り升す（髪結仕廻コタイツケヲ付ルカミニテ付置）　よいか　左様て御さる　ヤレ〳〵嬉敷や〳〵さて下六ハ殊の外遅いナア　左様て御座り升ス　汝ハ太儀なから迎に行ケ　畏て御さる　ヱイ　ハア引下六　能ふ〳〵嬉しや扨て〳〵能ふ出来た　頼た御方に御目にかけたらは御悦被成るて有ふ（ト言テ下六楽屋より出ル舞タイノ真中ヘユク）　下六ハ何をして居る事ちや知らぬ　早う戻りハせいて（ト言テ真中ニて下六藤六行当ル）　ヱイ下六　ヱイ藤六か何と

して来た　トヲ　そちか余り遅いニ依て迎ニ来た　下六　ちと烏帽子か出来なんたニ依て隙か入た　トヲ　イサ行ふ
サア〳〵来い　下六　心得た　トヲ　惣して汝ハ行先かはてぬそよ　下六　随分急ケ共遅ふ成事ちや　トヲ　イヤ是
しや申上ふ（目付柱ニテ言ナリ　藤六ハ上下六ハ下）　両人　ハア両人の者帰りました　トヲ　ハアミ爰てハない（トアトヱサカル　ト言テ下六先ヘタツ）　下六　成程爰てハ
ない　扨〳〵そそふな事ちや　今出た所を忘るゝと言ふ事か有物か　サア〳〵来い　トヲ　心得た
下　某に逢すバそちハ宿江ヱイ帰まい　イヤ是ちや　両人の者只今帰りました　トヲ　帰りました（ト楽屋ヘ言也　ワキ座ヘノク　ト言テ逆ニマワル）
下　爰てハ無い　トヲ　持て参たの　下　爰ちやと思ふたか　トヲ　兎角某に付て来い　ト　心得た　両人　しか
トウ　惣して汝ハ物知り立をすると言ふて何れもしかるそよ　是〳〵爰ちや（ト言テ脇柱江向言ナリ　ハシカ、リヘニケキモヲツブス）
るハ〳〵　下　扨〳〵合点の行ぬ事ちや　トウ　家ミにシメかさりをしたニ仍て知れぬわいやい　下　是ハ先何
とした物て有ふなア　トヲ　某の思ふハ様〳〵松はやしの時分と見へて音かする頼ふた人の宿□はやし物て尋ねまい
か　下　是は一段と能ろふ　何とはやすそ　トウ　有躰に言てはやすまいか　下　有躰とハ　トウ　先頼ふた人
ハ美濃の人しや程に信濃国の住人麻生殿の御内に扨汝や某の名を言て藤六ト下六か主の宿をわすれて拍子物をして行
くとはやすまいか　下　一段と能ふ早うはやせ　トウ　信濃国の住人　両人　信濃国の住人麻生殿の御内に藤六と
下六か主の宿をわすれてはやし物をしてゆく　トウ　是てハ留らぬわゐやい　下六　何と其跡にけふもさ有りやよか
りもそふよのとはやすまいか　トウ　是ハ一段と能ろふ　左右有ハはよふはやさまいか　下六　早うはやさしませ
藤六　信濃国の住人麻生殿の御内に藤六と下六か主の宿をわすれて拍子物をしてゆく　けにもさ有りやよかりもそふ
よの〳〵（信濃国より拍子モンモ云フウナツク二度メノ返シカラ下六ハ扇ニテ竹ヲタ、ク藤六ハ扇ニテ手ノヒラヲタ、クウキ笑主ウク笑）　シテ　藤六と下六か宿をわすれて拍子物て来る　是ハ
出すハ成まい　トヲ　信濃国の住人　下六　信濃国の住人　シテ　ヤイ〳〵　両人　そりや御声ちや〳〵　シテ　麻
生おれか内の者に藤六と下六か下等か内を忘れてはやし物をして来る前代のくせこと笑（ト言テ片ヒサツキ扇ニテ下ヲタ、キ扇サシ笑ナカラカタツク）
両人　麻生殿の御内に藤六と下六か主の宿をわすれて拍子物をして行く　シテ　出よふとハ思えと元結ハ取たりこた
付ハつけたり　爰成る窓からちよつと見て居ツ出ツもたへたア引笑　両人　藤六ト下六かはやし物をしてゆく（ト言テ扇ニテマネク）

両人　主の宿をわすれて拍子物をしてゆくけにもさありやよかりもそふよの〳〵　両人舞タイエ入大廻りに廻りシテトメシヤキリ藤六上ミ下六下モシテ真中

烏帽子屋有てもする此六儀ハ無し也　髪トク時ヒンニ櫛のアタラヌ様にトクナリ髪先ばかりトクヘシ先ネヨリマキ出ス先江千鳥かけにスルナリ

成上り

アト主　是ハ此辺りの者てこさる　今日ハ北野の御手水の夜ちや「毎も参詣致ス」今日も参ふと存ル　太郎官者有か如常　主　汝呼出ス別の事てない　今宵ハ北野の御手水の夜ちや　参詣しやふと思ふか何と有ふ　太シテ　是ハ一段と能御さりませう　主　左右有ハ其太刀をもて　主　畏て御さる　ハア御太刀持まして御さる　主　サア〳〵来い　太　ハア引　主　誠に何と思ふそ　此様に毎年「〳〵相替らす」参詣すると言ふハ目出度事ちやナア　太　御意被成る通り御目出度事てこさる　主　イヤ何角と言内に御前へ来た　太　誠に御前て御さる　主　汝もそれて拝め　太　畏て御さる　主　今宵ハ是に通夜をする汝もそれてまとろめ　太　心得ました　主　是ハ洛中に住居する心の直に無い者て御さる　此間ハ打続て不仕合に御座る　又今宵ハ北野の御手水の夜ちや　あれへ参り仕合を致し直ふと存ル　誠に此間中の様な不仕合な事ハ御座らぬ　何卒今宵ハ仕合を致度物ちや　イヤ何角言内に御前ちや　扨〳〵夥敷い参詣ちや　イヤ神前に何者やら通夜をして居ル　見れハこ金作りの太刀を持て居る　あれを才覚致度物しや　先たすわさつて見よふと存ル　中ミぬからぬ奴ちや何とした物て有ふそ　イヤ致様か有る　のふ〳〵嬉敷や〳〵一段の仕合ちや　先急てすかそふと存ル　主　ムウン〳〵能寝た事哉〳〵　早夜か明る　太郎官者〳〵（ト言テ扇ニテ下ヲタヽク）　太　能寝た事哉〳〵　主　ヤイ〳〵太郎官者　太　ハア　主　イサ下向せう　太　能御座りませう（ト言テ竹ヲ見てヒツクリ一ノ松へ行く）　太　是ハ如何な事御太刀か青竹に成た　何とした事ちや知らぬ　定めて寝て

居る内にすつはめか取り替て置たと見へた　道ミ申訳をせう　主やい〳〵何をして居る　サア〳〵来い　太畏て御さる―　太扨此方ハ物の成上りと言ふ事を御存て御座るか　主いかにも知て居る　位のひくい者か官に登るを成上りと言　太左様て御座り升ス　先山の芋かうなきに成上り升　主フム引　太つはめが飛魚に成り娘か姑メになり上り升　主イヤ爰な者が　物の順当て成上りてハ無いゝやい　太毎も嫌て居ませうより姑になれは成上りてハ御座り升せぬか　主言へは其様な物ちや　太扨此方ハ熊野の別当とのゝ蛇太刀と言を御存て御さるか　主何をも知らぬ　太御存なくハ語て御聞せ申ませう　主急て語て聞せい　太畏て御座る　太語り或時別当殿御狩りに出させられて山中ニ太刀をわすれて帰らせられた　余の者か取に参れは蛇に見へ又別当殿の御内の者か取に参れは其儘御太刀て有たと申か何と気毒な事てハ御さらぬか　主名作のお太刀ハ其様な奇特か有物ちや　太此方の御太刀も名作て御さるニ仍て成上つたも知れませぬ　主其太刀ハ十代ちやニ仍而矢張其儘て有かよい　太か様に申内ニ何とやら成上たそふに御さる　主それは何に成たそ　太されはこそこひた物に成上りました　主何んになつたそ　太物て御さる　主何しや　太此様な青竹に成上りました　主何ても無ゐ事　しさりおろふ　太ハア　主ヱイ　太ハア

シテ太郎官者　如常　主　同断

スツハ　ホツシ羽織　半袴　ヲクソ頭巾　上帯　入用　太刀　青竹

腰いのり

シテ是ハ出羽の国羽黒山の山伏てす　此度大峯かつらきへ分入り難行しやしんの行法をも殊故のふ相勤只今本山江

罷帰る　夫ニ付て某大伯父子をもつて御座るか此中ハ久敷う御見舞申さぬ　序なから見舞て参ふと存ル　誠に山ふしの行程難行ハ御座らぬ　或時は岩木を枕とし根子に置寅に起様〳〵の行法をも勤ねはたつとい山伏にハなれぬ事ちやイヤ何角言内に是ちや　物申案内申　ヘ　イヤ表に案内か有　案内とハたそ　ヘ　某ちや　ヘ　ヱイ京の殿よふ社御出被成升た　ヘ　今日来るハ別の事てもない　大伯父子様にハ御機嫌よふ御出なさるゝか　ヘ　随分息才て御座り升る　常〳〵其方の事を被仰て御座る　ヘ　定而そふて有ふ　先某か来た様子を言へ　ヘ　畏て御さる　先こふ御通り被成ませ　ヘ　心得た　ヘ　申〳〵大伯父子様御座り升るか　京の殿の御出て御さる　大伯父ヘ　ヱイ〳〵〳〵何と言そ　今日ハ大伯父にとゝをくりやう　大伯父ハはかわるいに依て骨のない身ところをくれいよ　ヘ　成程夫も進しませうか京の殿の御出て御さる　ヘ　ヤア京の殿のわせたと言か　ヘ　左様て御さる　ヘ　ヤレ〳〵なつかしや〳〵ヱイ〳〵〳〵して京の殿ハとれにこさる　ヘ　ハア是に居り升ス　ヘ　ヲヽやれ〳〵京の殿能御出やつたのふ　ヘ　此中ハ久敷ふ御見舞も申ませなんたか先ハ御機嫌能さそふて御目出度存ます　ヘ　ヲヽ大伯父も随分息才な此方も豆そふて一段ちや　ヘ　ハア忝ふ存升ス　私も随分息才に御さり升ス　ヘ　ヲヽ久敷う見ぬ内ニいかふ大きうなりやつた　ア、何そ遣り度か　太郎官者何そ遣る物ハ無イか　ヘ　ハア何も御さりませぬ　ヘ　イヤ此中こちの犬か美敷いまたらなゑのころを生んたあれを壹疋遣てくれい　ヘ　畏て御さる　ヘ　夫ハありかとう存升ス　ヘ　ヲヽ嬉敷か〳〵　ヘ　ヤイ〳〵太郎官者　ヘ　ハア　ヘ　大伯父子様ニは某を何迄も子供のやうに思召ナア　ヘ　左様て御座り升ス　ヘ　大伯父子様は久敷う御見舞申さぬ内にいかふ御腰かかゝみました　ヘ　ヲヽ大伯父ハ年ハ寄ル目ハうとふなるはハ悪し其上此様に腰かこふて難儀する事ておりやる　ヘ　夫に付まして私ハ此度大峯かつらきへ分入難行しやしんの行法をも殊ゆへのふ相勤只今本山江罷帰り升　大伯父子様の御腰を私の行法を以てすくに成様に祈り直して上ませうか　ヘ　ヤア太郎官者　ヘ　ハア　ヘ　京の殿ハ何とおしやる　ヘ　ヤ京の殿ハ今度大峯かつらきへ分入難行しやしんの行法をも殊故のふ御勤被成只今御本山江御帰り被成升ス　又大伯父子様の御腰を行法を以て直になるやうに祈直して上ませうと被仰升ス

大ヲヽやれ〳〵京の殿なれはこそ能言ておくりやつたれ　左右有ハ直に成様に祈直ておくりやれ　シ心得ました　夫れ山伏といつは縁の行者の跡をつきこんたいりやうふの峯を分ケくゑまんたらの柿のすゝかけいら高の珠数デハ無ふて只むさとした珠数玉をつなき集メいら高の珠数と名つけひと祈いのるならはなとか気とくの無るらん　ほふろん〳〵〳〵〳〵　大アヽイタ〳〵〳〵　シサア能御さり升　大ヤレ〳〵久敷ふりて天道を拝ふた此様な嬉敷事ハ無い　して是ハ毎まてこふして居る事ちや　シ毎迄と申事か御座ろふか　いち後かゝみハ致しますまい　大イヤ〳〵夫てハ近比迷惑な　左右有ハ元之通りにしておくりやれ　シ心得ました　いかにそり過たる腰也とも最壹祈いのるならはなとか気毒のなかるらんほふろんほろふ〳〵〳〵　大アイタ〳〵〳〵　大扨〳〵是は奇特な事ちや　大ア、是〳〵京の殿〳〵　シ何て御座り升　大是は余りかこふて難儀しや最そつと祈直しておくりやれ　シ心得ました　ヤイ〳〵太郎官者　大ハア　シ是ハ某の行法か余りきゝ過ると見へたナア　大左様そふに御座り升る　シ今度は某か祈る程に汝ハ能か減につかをかへ　大畏て御座る　大サア〳〵早う祈直してくれさしませ　シ心得ました　いかにあちらこちら定らぬ腰也ともケ程尊き山ふしかいら高の珠数の爪緒に入たるをさらり〳〵と押もんて今ひと祈いのるならハなとかよいかけんに成らさらんほふろんほろふ〳〵〳〵　大アイタ〳〵〳〵　シ太郎官者後ろへかへ　大心得ました　シ是ハいかな事　ほふろんほろふ〳〵〳〵夫前江かへ　大アイタ〳〵　シ後ロへカへ　大是ハ迷惑な事しや　大是ハいかな事　シ前へかへ〳〵　シほふろんほろふ〳〵〳〵　大扨〳〵にくいやつの　主ア、申　御あぶのふ御座り升る　太郎官者御留メ申せ〳〵　大申御あふなふ御さり升る　シカ〳〵

シテ山伏　トキンス、かけ　水衣　ク、リ　少刀　珠数　扇

アト大伯父　角頭巾　着流し　大伯父面

アト太郎官者　如常

シテ　是ハ諸国一見の者て御座る　某未タ都を見物致さぬ　此度思ひ立都へ登ふと存ル　誠に出家程心の安い者ハ御座らぬ　衣一巻珠数一れんさへ有ハ何方へ参ふとまゝな事て御さる　イヤ此辺へ来たれハ早日か暮た　宿か借り度物ちやか　是に高札か有る　何ミ往来之人に宿を借事堅禁制也　是ハいかな事　何とした物て有ふそ　イヤ思ひ付た此高札を見ぬ躰ニ而宿をかろふ　先案内を乞　如常

シ　旅の出家て御さる　一夜の宿をかして被下　ア　安い事てハ御座るか在所之入口に有高札を見させられなんたか　シ　何をも存ませぬ　ア　すれハ尤て御座る　此所の大方て往来之人に宿を借す事ハ成ませぬ　シ　夫ハ気毒て御さる　出家の事なれは慈非にも成ませう　何卒借して被下　ア　堅い大方ちやニ依て成ませぬ　シ　すれはとふ有ても成ませぬか　ア　其通て御さる　とれへ成とも往て泊らせられぬ　シ　扨〳〵難義な所江来た事哉　何とした物て有ふそ　にか〳〵敷事ちや　ア　扨も〳〵いたわ敷事ちや　思ひ出した　申様か有るのふ〳〵

シ　何て御さる　ア　宿をかしておまそふ　シ　夫は忝ふ御さる　ア　イヤ某の宿を借スてハない　あの向ふに辻堂か有　あれへ行てとまらしませ　シ　先もつて忝ふ御さる　愚僧ハとれに居ても苦(クル)しう御座らぬか此笠ハ師匠よりつたわつた笠で御さる　此笠に宿をかして被下　ア　笠を置分な苦敷うない　とれに成とも置しませ

シ　夫ならハ是に置ませう　ア　いつ方になりとも置しませ　シ　明日ハ早う取に参るて御座ろふ　ア　翌ハ早ミ出さしませ　シ　最ふこふ参る　ア　御さるか　両人　サラハ〳〵〳〵　シ　なふ〳〵嬉しや　致し様か有る　ア　ヤイ〳〵座敷に人影か見ゆる　内の者てハないか　扨〳〵合点の行ぬ事ちやー　ヘ　是ハいかな事　さい前の出家しや　のふ〳〵御坊　シ　何て御さる　ア　宿を借事ハならぬと言になせ是にお居やる　シ　此方のかまわせらるゝ事てハ御さらぬ　ア　イヤ爰な者か　身共か内に居てかまう事て無イとハ何とした事ちや　シ

此方ハ最前此笠に宿を借とハ言わせられぬか　ア成程笠ハ預つた　ベ愚僧は又笠に宿を借りました　ア笠より外江出た所ハ何とおしやる　シ切て成とそつゝて成共しておかしませ　ア夫爰か出た　シ出わ致さぬ　ア出ハ致さぬ　ベそれ爰か出た　ア〳〵〳〵　シ〳〵〳〵　ア扨〳〵面白い御坊しや　シ私ハ是かよふ御さる　ア此上ハ大方を破てひそかに宿を借そふほとに笠を取てゆるりと居さしませ　シ夫ならは取ませう　アゆるりと休息させられい　シ忝ふ御さ　ア きやうくつそふてわるい　平にとらしませ　シアゝよふ寝た事かな〳〵　こんきやうの時分ちや　勤を致そふ　ア いかふ草臥た　さらハちとまとろもふ　シ何て御さる　ア奇妙無量経ヨム　ア是ハいかな事　のふ〳〵御坊　シ忘れましたゆるして被下　ア重而おしやるな　シ高こゑにいふ物ておりやるか　シ忝ふ御され共おんしやかいをたもつて酒を呑事ハなりませぬ　ア身共ハ寝酒をたふるか御坊も参らぬか　シシカ〳〵　ア扨　ア夫は気之毒しや　某ハたひやう　其方夫て見させられぬ　シシカ〳〵　ア さらはたひやう　シ見物致そふ　ア アゝ面白ひ御坊ちや　一ツ参らぬか　シイヤたへ升まい　ア最壹ツ呑ふ　シよふ参る事ちやのふ　ア殊の外面白う成ました　御坊も平ニ参れ　シ夫成らはたふる事ハならすともちとすふて見ましやうか　ア すわせらるゝ分ハ大事ないか　シ苦敷御座らぬ　ア夫ハ一段ちや　是を慮外申ふ　シシカ〳〵　シよい酒て御座る　ア気ニ入たらはいか程も参れ　シ最一ツたへませう　小謡ウタツテツクナリ　シ是を此方へ進しませう　ア頂ませう壹ツ請ました程に一さし舞せられ　シ愚僧ハ舞をまふた事ハ御座らぬ　ア夫　ア 経ハ肴に成ませぬ　浪〳〵の御坊てハ無いと見受ました平に舞せられ　シ是へ被下　小謡シカ肴に経成ともよみませうか　ア扨〳〵面白い事て御座つた　亦此方へさしませう　シ夫ならば舞ませう　ア舞　シ夫江戸ませう　ア いたゝきませう―　ア扨こふ請持た所て最一さし舞せられ　シ最早ゆるして被下　ア イヤ〳〵なみ〳〵の人てハない　最前のハみしこふて見たらなんた　今度ハ何んそ長い事を舞せられ　シ夫ならは愚僧も酒に酔升る　時分も能ふ御座る程ニ此所を舞立に致ふ　ア夫か一段と能御座ろふ

ベ　此方ハ地蔵舞を見まいな〳〵と言てはやして被下　ベ　心得ました　ベ　サア〳〵早うはやさせられい
ベ　地蔵舞を見まいな〳〵　ベ　地蔵の住し処ハ　ベ　地蔵舞を見まいな〳〵　ベ　加羅た山に安養界地蔵
俄鬼畜生修羅人天に山と卒天貳拾五宇を廻ツて罪の深き衆生を此しやくしよふを取直しかいすくうてハほつたりつい
すくうてハひつたりむかし釈迦大師の忉利天に登て御説法のみきりに此愚僧を召れて忝なくも如来の小金の御手を差
上ケ地蔵坊かつむりを三度まてさすつて千歳なれや地蔵坊〳〵と末代の衆生を地蔵に預ケ忝(ママ)也と仰を請て此の方走り
めくり候得と誰やの人哀みて茶の一ふくもくれさるを此御座敷江参りて三斗入て拾はい間の物て十四はい縁日に任せ
て廿四盃たへたれハこふしの花か目に上り左の方へよろ〳〵右之方へよろ〳〵よろ〳〵〳〵とよろめけと慈非の涙た
せきあへず衣の袖を顔に当て〳〵て六道の地蔵かゑひなきしたを御ろふせ

アトシヤク謠
か様に申物語疑はせ給ふな旅人はる〳〵きぬる唐衣きつゝや舞をかなすらん

蟹山伏

シテ　是ハ出羽の国羽黒山の山伏てス　某今度大峯葛城江分入難行社心の行法ヲも事故のふ相勤只今本山江罷帰る
合力有カ　ファト　ハア　ベ　居たか　ベ　御前ニ　ベ　汝呼出ス別の事てない　此度大峯葛城江分入難行しや
しんの行法ヲも事故無ふ相勤只今本山へ罷帰ル　何と目出度事てハないか　ベ　御意被成るゝ通り御目出度事て御
座り升　ベ　其通りちやイサ下向せう　サア〳〵来イ　ベ　畏て御さる　ベ　誠に山伏の行程難行ハ無イ　子
ニ伏し寅ニ起様〳〵の行法ヲも勤むるに依て目の前ニ飛鳥をも祈落ス事ちや　ベ　左様て御座り升　夫故此方の行
法の事ハ影て殿方も御ほめ被成升　ベ　何ちやいつれもかげほめらるゝと言か　ベ　左様て御さる　ベ　寔ハ

そふのふて叶わぬ事ちや　扨あの方を立時汝に逢に来たわ誰ちや　ア誰も参りハ致ませぬ　ベハテ覚のわるい者ちや　夫レみめの能女か来たそよ　あれハ誰ちや　ア あれハ私の妹て御さる　ベ何んちや妹ちや　ア左様て御座り升る　ベ扨も〳〵汝とハ違ふてみめよしちやナア　ア是ハ御恥敷存升る　ベ此後は身共か方江も心安ふ節〻来る様ニ言へ　ア夫は忝ふ存升ス　ベ扨そちも随分此後ハ精を出して加じ祈祷を覚る様にせい　ア ハア私も御蔭て覚とふ存升るか中〳〵私共の参りそふな事ては御座りませぬ　ベ成程六ケ敷事てハ有れとも又覚ゆれは其様ニもない　精を出セ　教て遣ろふそ　ア夫ハ忝ふ存升　ベサア〳〵来い　ア畏て御さる　ベイヤ山深ヲ来たれハ俄に雲の景色か替た　合点の行ぬ事ちや　ア俄に雲の景色かかわりました　ア、気味の悪ひ事て御さる　ベ山道ハ急くかよい　サア〳〵来い　ア畏て御座る　ベさて〳〵合点の行ぬ事しや　ア気味のわるい事て御座り升ス　ベ何やらどふ〳〵と鳴て来た　ア ヤア〳〵しきりになります　是は跡へ御帰被成ませ　ベイヤ爰な者か　汝ハひきやうな事を言ふ　其様な事て何と山伏か勤る物ちや　ア デモ命有ての山伏て御座る　平ニ跡へ御帰り被成ませ　ベまた其つれを言　身に引添ふて来イ仕切りになるわた（二人共ワキザヘニケル）　ア是ハにか〳〵敷事ちや（カニ一ノ松江出ル左右ヘアルク）　ベそりや何やら出た　ア ア、何やら出ましか　汝をつる、ハ此やうな時の為しや　往て尋て来い（ト言テ引出ス）　ア是ハ御先達の役て御さる　平に此方御出被成ませ　ベ扨〳〵汝ハひきやうなやつノ　ヤイ〳〵己は何者ちや（カニ足トメ）　ア二眼天に有り一甲地に付す大足貳束小足八そく右行左行シテ世を渡る者の情しや　ベヤイ〳〵合力あれを何者そとおもふたれハあれハ蟹ちやトハ何とした事で御座る　ベ先二眼天にありとハきやつか眼□の毎く上に付て有るに依ての事ちや　又一甲地ニ付すと言ふハアノ甲大足とハはさみの事小足八そくとはアノ足右行左行とハアノ如く右左へ歩行ニ仍ての事ちや　ア フウすれは蟹に極りましたか　ベうたがいもない蟹ちや　ア のかせられい致し様か御さる　ベヤイ〳〵りやうしな事をするなよ　ア ヤイ〳〵扨、己ハにくい奴の　此尊い御先達の御通り被成るに蟹の分として

さまたけをなす　そこをのいて通をせ　のかつは此金剛杖て甲を打て〳〵打割てくりやうそ（ト言テ杖ヲフリ上テタ、クカニハスイテ合力ノ耳ハサム）

ア　アイタ〳〵〳〵　シ　何とした〳〵　ア　此様にはさみました　シ　それ〳〵汝がいらぬ事をする

ニ仍ての事しや　ア　アイタ〳〵〳〵　シ　どれ〳〵身共か放さして遣ふ放せ〳〵（ト言テ合力ヲトラエ□リ）　ア　アイタ

〳〵〳〵　シ　放せ〳〵はなしおれ　ア　ア、申耳かちきれ升アイタ〳〵　シ　是ハ如何事　扨、気の毒な事

ちや　何とした物て有ふそ　イヤ日比の行法は此様な時の為ちや　一ト祈いのつて追付はなさして遣ふそ　ア　兎

も角も被成て早うはなさして被下　シ（祈）　いかになんし慥ニ聞　ゑんのふばそくの行躰をうけ三ツのお山を踏分て難

行の功をつむ事一じきだんじき立行居行此先達か祈ならはたちまち命を取らんとていら高の珠数のつめ緒ニ入たるヲ

さらり〳〵と押もんてひと祈こそ祈たれホヲロン〳〵〳〵〳〵　ア　アイタ〳〵〳〵〳〵申〳〵其珠数の音て猶シ

メます　放ス事てハ御さらぬ　アイタ〳〵〳〵　シ　扨、にか〳〵敷事ちや　何とした物て有ふそ　イヤ思ひ付た

蟹のはさんたにハふきのいんのむすひかくれハ立まちはなすと聞た　最一ト祈いのつて放さして遣ふそ　早う祈て放

さして被下アイタ〳〵〳〵　シ　いかにおそろしき蟹成りともふきのいんのむすひかけいろはにほへとんと祈るな

らは何とかちりぬるおわかなれホヲロン〳〵〳〵〳〵　ア　アイタ〳〵〳〵　シ　ホヲロン〳〵〳〵（カニ両人ハサミコカス）

シ　今の蟹ハとれへ往た　ア　あれへ行升ス　シ　ちやつととらへい〳〵　ア　最早御無用に被成ませ〳〵

シ　遣るまいそ〳〵

道具

山伏（シテ）　トキンス、カケ　大口テモ衣　嶋　少刀か　太刀　珠数

合力（アト）　下ク、リ嶋　ヲヒ　コヲシ　コンコウ杖

蟹　カルサ　黒頭　ケントク　ソハツキ　笠ヲ甲ニスル

道具　コンコヲ杖　黒頭　面ケントク　ヒノキ笠

シテ大名　遥か遠国の者て御座る　訴訟の事有て在京致ス所に何事も願の儘に相叶い安堵之御行所給り新地を過分に拝領致し其上御暇迄被下た　先太郎官者を呼出し悦はせう　太郎官者有か　ハア　居たか　御前に　汝呼出ス別の事てない　永ミ在京する所に訴訟毎〳〵く相叶安堵之御行所給り新地を過分に拝領したか嬉しうはおもわぬか　扨〳〵夫ハ御目出度事て御座り升　其上国許江之御暇迄被下たか何と悦しうハ思わぬか　是ハ重ね〳〵御目出度う存升　扨御暇を被下た事なれハ近日国元江下らふと思ふか彼の者の方江ハ往た物て有ふか某か行には及まいか　ハア是ハ御出不被成ハ御恨て御座りませふ　御暇乞の為御出被成たらは能御座り升ふ　某もそふおもふ　左右有ハ行ふ程に汝供をせい　畏て御さる　サア〳〵来ゐ　ハア　誠に此中ハ久敷う行もせす便りもせなんたに依て定而恨んて居るて有ふナア　御意被成る通嘸御恨て御座り升ふ　叶わぬ隙入か有た抔とそち取なしを言てくれい　心得ました　イヤ何角言うちに是ちや　某ハ直に通る程に身共か来た様子を言ゑ　畏て御さる楽屋へ向て中〳〵頼ふた御方の御出て御座る　誰やら聞馴た声がするエイ太郎官者殿よふ来さしましたのふ　今日ハ頼ふ（ママ）御方の御出被成て御さる　何頼ふた御方の御出被成た　左様て御さる　ヤレ〳〵御なつかしや〳〵　是ハよふ御出被成ました　此中ハ来なんたか豆そふて一段ておりやる　童も替る事も御座りませぬ　此方様ニも御機嫌能さそふて御目出度思ひ升　某も随分息才ナ　此中ハ久敷う御出も不被成御便りも御さらなんたかけふハどち風か吹て御出被成ました　定而そふおしやらふと思ふた　某ハ来とふ思ふたれとも太郎官者か知る通り叶わぬ隙入か有て得来なんた　頼ふた御方ハ御出被成とふ思召され共何角御用か有り其上御目出度事か有て御隙を得させられいてそれゆへ得御出被成ませなんた　童ハ其様ナ事とハ存ませす先にハ何角仰られたれとも御

心か替つた物て御座ろふと存て御うらみニ思ふて居ました　ベ　いかな〳〵其様な事てハない　叶わぬ隙入か有た
扨永ミ在京する所に訴訟願の儘に相叶い安堵之御行所を給り　新地をも拝領し其上御暇迄も被下た　其方も悦ふてお
くりやれ　女　ヤレ〳〵御目出度事て御座る　何卒早う御訴訟の叶わせらるゝ様ニと思ひました　太郎官者殿嬉敷
事ちやノヲ　太　御目出度事て御座る　ベ　夫に付て今日ハ咄ス事か有て来た　太郎官者言へ　太　此方被仰
ませ　ベ　ハテそち言ふてくれゐ　女　申〳〵其様に仰らるゝハ何そ心元ない事てハ御座らぬか　太　別の事
ても御座り升ぬ　只今仰られ升通り御暇を被下た事なれは近日御国元へ御下り被成ます　けふハ其御暇乞ニ御出被成
ました　女　ヤア何とおしやる　御暇を被下た事成れハ近日御国許江御下り被成るゝ　其御暇乞に御出被成たとお
しやるか　太　左様て御座る　女　泣　ベ　のふ〳〵何を落るいおしやる　女　扨も〳〵此様な思ひも寄ら
ぬ事ハ御座らぬ　御訴訟の叶わせられたは御目出度御座るか御国許へ御下り被成ると御座れは童も此方に御分れ申て
何と致ませう泣ク　ベ　ムウ　女　此様な事ハ前広にも知れませう物を御知らせも被成いて直に御暇乞と御座る
は日頃何かと言わせられたと違まして御恨しう存升ス　ベ　成程尤なれ共俄に御暇を被下たに仍て知らする間も無
かつた　かんにんしておくりやれ　太　是ハ如何事　誠に泣と思へはびん水入の水を目に付てなく真似をする　扨
ミにくい事ちや　女　思へハ〳〵女程はかない物ハ御座らぬ　此様に御分れ申事ハ知らず玉椿の八千代まてと思ふ
て居ましたにケ様な叶しい事ハ御座らぬナク　ベ　其様におしやれハ心か引されてわるい　余りなけいておくりや
るな　ベ　扨〳〵此方ハ心強い事を被仰るゝ　是か何と泣すに居られませう　返ス〳〵も御名残おしふ存升ナク
ベ　夫ハおしやる迄も無い　身共も名残おしふハ思へとも是非に及ぬ　国許江居たらはさい〳〵文の便りもするて
有ふ　其内にハ程のふのほつて逢ふ程に待て居さしませ。　女　アノ仰られ升事ハ貳三日御出被成いてさへ何と被
成た事そ御心はし替りハ致さぬかと存ておなつか敷存升するに来年の事か何と待れませうぞ　申〳〵とれへ御出被成
ました　ベ　ヤア〳〵とれへも行ハせぬ　女　童か側に御出被成て被下△　。　太　申〳〵千渡御出被成ませ
ベ　何事ちや　太　此方ハあれを誠に鳴と思召升か　ベ　誠に泣いてうそに泣るゝ物か　太　また其つれ

を被仰れ升る　あれハひん水入の水を目に付て泣ま似をして此方をたばかるのて御さる　シ扨〳〵そちは心無い
者ちや　涙と言物ハ四十四の骨ほねかうるをわねは出ぬ物しやと言　其様な事か有物か　太是ハ如何な事　扨
〳〵にか〳〵敷事ちや　何とした物て有ふそ　イヤ思ひ付た致様か有（ト言テひん水入と墨と指替ル△）　シいかにも尤ちや左
右有ハ国元へ居たらはそふ〳〵迎をおこそふ程に待て居さしませ　女只今社其様に仰らるれ御国許へ御出被成た
らは升花か御座ろふニ仍て童か事ハ思召出さるゝ事ハ御座り升まい泣　シそれハ日頃にわ似合ぬ事をおしやる
何しに某か其様な事か有ふ　気遣いおしやるな　女左様有らハ必〳〵御わすれのふお迎をたのみます　シい
かにも忘るゝ事てハ無イ　早う〳〵迎をおこそふそ　女夫ハ嬉敷う思ひ升ス　余り御名残おしふ御座る　御顔を
とくと見て置ませう　シヲヽ〳〵如何にも能見て置しませ　女泣　ロ　シ太郎官者　太ハア　シ
あれハ何としたかほしや　太嘘ちやと申たれ共御承引御座らぬに依て水と墨と取かへて置ました　シ
扨〳〵腹の立　うまん〳〵と某をたましおつた　何とした物て有ふそ　イヤ爰に鏡か有　是を遣つてあのつらをきや
つに見せふ　太能御座りませう　ロ　女扨も〳〵も叶しい事て御座る　ケ様に御側に居升るも今日を限りと思
ひますれは思わす涙かこほれ升ナク　申〳〵　シヤア〳〵　女とれへ御出被成ました　シとれへも行わ
せぬ　女最早御語り申も今暫て御さる　何卒側に御出被成て被下　シヲヽ尤じや　国許江居たらは太郎官者
を迎にお起そふそ　女夫ハ嬉敷く思ひます　太郎官者来ておくりやれや　太いかにも私か御迎に参るて御座
りましやふ　シ扨そなたに何かなとおもへ共有合せぬ　是ハ某か朝夕手なれたかゞみちや　逢ふまてのかたみに
其方におますぞ　女忝ふハ御座れ共其様な物ハけつくおもひのたねて御さる　御無用に被成ませ　シ太郎官
者やれ　太此方遣されませ　シはて遣れイヤイ　太ハア申〳〵是を進せられ升ス　女是ハ忝ふ御座
る　某をなつかしう思わします時ハそれヲ見て心を慰ておくりやれ　女左様ならハこなたをなつかしう思ひ升る
時ハ此方ちやと思ふて此かゝみを見ませう（ト言テカヽミ見ル）　女ヤアヱイ腹立ヤ〳〵誰が此やうな事をしおつた　太郎
官者て有ふ　太私ハ存ませぬ　女己か知らいて誰知ろふ（ト言ヲツカマエルいろ〳〵仕様あり）　太ア、是ハ何と被成まする

女 何んと、言事か有ものか　覚へたか〳〵　ヱイ腹立や〳〵　ヤイわ男　シ 何ちや　女 此様な事をさして見ていると言ふ事か有物か　シ イヽヤ身共ハ知らぬヱヽ何とするそいやい　女 そちニもぬらいて置ふかヱイ腹立ヤ〳〵　女 申〳〵頼ふた御方早う御出被成ませ　シ ヤイ〳〵何とする〳〵　女 ヱイ腹たちヤ〳〵己くいさこふか引さこふか　シ ゆるしてくれゐ　女 腹立ヤ〳〵

首引

ァト 是は鎮西の八郎為朝て御さる　某永〳〵西国に罷在て只今都へ登る　先急て参ふ　誠に月日の立ハ早い物しやかり初の様に存たに久敷う逗留した　定而都てハ待て居るて有ふ　イヤ何角言うちにひよふ〳〵と打ひらいた野へ出た　扨〳〵広い処ちや　是は何と言所ちや知らぬ　ヲヽ夫〳〵これハ張り摩の稲見野しや　誠ニ此処ハ七ツ下り暮に及へは人通いも無いやうに聞た　いか様暮に及ふたれは人かよいも見へぬ　扨〻広イ所ちや宿を取ふニも家ハなし

シテ 人くさゐ〳〵　しきりに人くそふなった　クサイ〳〵　されハこそアレイ何者やらとおる取てかまう

ア 是りや何とする　シ 何とゝハ悪ひ奴の　此処ハはりまの稲み野と言ふて七ツ下り暮に及へハ人の通らぬ所を何者なれハひとり通る　ア 是ハ鎮西の八郎為ともと言者しや　シ 何者にもせよ独り通るハくせ者ちや　取てかまう　ア 先待て　シ 待とハ何と　ア 様子も知らいて通た其段ハゆるしてくれイ　シ どふあらふ共一トかみにしよふか爰に思ひ出た事か有　某秘蔵の姫を持た　終に生物を喰ぬ　喰初にくわしたいか姫に喰りやふか但シ某か喰ふか　ア 迚も喰るゝならは姫にくわりやふ　シ 何姫に喰りやふ　ア 中〳〵　シ 笑　ヤレ〳〵やさしい事を言出た　さらは姫を呼出して喰しやふ　ヤイ〳〵姫　ちやっと来〳〵　姫コイ〳〵　シ と、様か呼せらるゝそふな　召るゝハ何て御さる　シ 一段の事か有　そちハまた生物を喰ぬ　あれに若ひ者か居る

千渡居て喰へ　ヘ　童ハいやて御さる　と丶様の跡からならは喰ませふか生キた者はこわい　ベ　イヤ爰な者か
と丶が子の様ニも無ゐ事を言ふ　早ふ往て喰へ　ヘ　と丶様も参るならハくわう　ベ　某か爰に居るニ依て気
遣ひハない程に早う往て喰へ　ヘ　そうあらハと丶様もついて居て被下　ベ　心得た　ベ　サア〳〵早う喰へ
〳〵　ヘ　のふおそろしや〳〵　ベ　何とした〳〵　ヘ　こわい目て童をにらみました　ベ　扨〳〵悪ひ奴
の　ヤイ〳〵なせに姫をにらみおつた　ヘ　にらみハせぬ　姫の顔かうるわしさに見たのちや　ベ　是ハ尤しや
ベ　ヤイ〳〵にらみはせぬ　貞を見たのちやと言ふ　気遣イハ無イ　早ふ往て喰へ　又付て居て被下　ベ　成
ほと合点ちや　早う喰へ〳〵　アイタ〳〵〳〵　ベ　何とした〳〵　ヘ　した丶かにわらわをやまし升た
ベ　言語同断にくゐやつの　ヤイ〳〵なせ姫をやましおった　ヘ　扇遣イをしたかさわった物て有ふ　ベ　兎
角色〳〵とぬかしをる　埒が明かぬ　某か只壱かみに取てかまふ　ヘ　先御待ちやれ　ベ　待とハ何と　ヘ
昔から鬼神に横道無し迚罪の無イ者を腹クせられまい　何そ勝負をして勝たならは腹くせらりやうそ　ベ　是ハ尤
ちや　いか様日暮に此処を通たと言ふてさのみとがと言ふてハない左右有ハ勝負ニハ何をする　ヘ　うて押を致ふ
ベ　一段とよかろふ　さらば仕らふ　イヤ〳〵姫に喰る丶物ならは姫と勝負をせふ　ベ　是も尤しや　更ハ姫と
談合しよふ　ヤイ〳〵そちに喰る丶からハおぬしと勝負をしようふと言か何と有ふ　ヘ　童ハいやて御さる
ベ　イヤ〳〵と丶が側に居るによって気遣イハ無イ　腕押(うで)をせい　ヘ　左右有ハと丶様側に居て被下　ベ　成
程合点ちや　舞台へ入ル　サア〳〵姫まくるナ〳〵　ヘ　アイタ〳〵〳〵　ベ　何とした　ヘ　童か手をすり付まし
た　ベ　扨〳〵にくいやつの　ヤイ〳〵なせ姫か手をすり付た　ヘ　勝負の事なれハ遠慮ハ無イ　今ノハ某か勝し
や　ベ　イヤ〳〵また知れぬ　最一ト勝負せい　ヘ　今度ハあしおしを致ふ　ベ　よかろふ　サア〳〵今度ハ
足押をせい　ヘ　又側に居て被下　ベ　なるほと合点しやサア〳〵姫負くるナ〳〵　今度ハとミもしつと側に見
て居るからハ気遣ひ無イそ　ヤイ無理な事をするな　姫負くるな〳〵　ヘ　アイタ〳〵　ベ　何とした〳〵
ヘ　童かはぎをした丶かにいためました　ベ　言語同断　慮外ナ奴の　なせ姫か足をいためた　ヘ　今も言通

り勝負に遠慮ハ無イ　又某か勝ちや　ヘイ、ヤまた知れぬ　最一ト勝負せい　ヘ今度ハ首引ヲ致ふ　ヘムウ首引一段と能ふ　サア〳〵今度ハ首引をせい　ヘ最早こりはてました　いやで御さる　ヘイヤ〳〵首引は跡からとミが手伝ふて遣るに依て気遣ひハ無イ程に早ふ引ケ　ヘ左右有ハ心得升た　ヘドレ〳〵首引よかろふ某か能いよふにしてやらふ　さらハ先篤と縄をかけい　ヘ心得ました　ヘヤイもそつとこちへ寄れ　己も篤と縄をかけい　サア能いそ　姫まくるな引け〳〵負るナ〳〵　ヘエイ　ヘアイタ〳〵とミ様首かいとふて成ませぬ　ヘとれ〳〵とミが手伝ふて遣るぞ　それや引ケ〳〵まくるナ〳〵〳〵　ヘエイ　ヘアイタ〳〵　ヘアヽとミ様首が千切升　ヘヤイ先其様に引くな　ヱヽイみな何をして居る事ちや　早う来ぬか〳〵　ヘ何事て御座る〳〵〳〵〳〵　ヘ姫とあの若イ者と首引をする　姫か方かよわい程にサア〳〵皆カヽレ〳〵　ヘ心得ました　ヘかミれ〳〵　ヘ心得ました某が声をかくる程にそれを合図に情を出してひけ　ヘいかにも心得升た　ヘイヤ先某か声を懸るまで引ナ　中〳〵強いやつちや程に皆油断をするな　ヘ合点て御さる　ヘそち立も皆ぬかるな〳〵　ヘ私共かかゝるからわぬかる事てハ御さらぬ　ヘヲヽそふちや〳〵　サアこゑをかくるそ　皆引ケ〳〵　ヱイサラ〳〵〳〵〳〵　ヘヱイサラ〳〵〳〵〳〵　姫か方かよわいわ〳〵　ヱイサラ〳〵　ヘヱイサラ〳〵〳〵〳〵　ヘ姫か方かよわいわ〳〵　ヱイサラ〳〵　ヘヱイサラ〳〵　ヘヱイ〳〵サラ〳〵ヱイサラサア　ヘヱイ〳〵ウヲヽ　ヘアイタ〳〵　ヘ是ハ如何事　何とした〳〵　ヤア今のやつハとれへ居たヘあれへ行升　ヘちやつととらへい　ヘ心得ました　ヘウンあふない　けがハせなんた〳〵　ヘ童ハいやしやと言ふ物を無理にさせて此やうないたいめに逢ふた　ヘヲヽ尤じや〳〵　かんにんのさしませ　ちやつと来さしめ〳〵　ヘ心得ました　ヘヤイ〳〵早う取らへい〳〵　ちやつと来さしめ〳〵　アノ大ちやく者　やるまいそ〳〵

アト　鎮西　大口　太刀　ハチマキ　髪サバキ
扇持　ソバツキ

シテ　親鬼　唐織ツホヲリ　赤頭　下クヽリニ而も　面武悪　竹ヅエ　但ハツヒハンキリニ而も

姫　白ふり袖　乙面　黒頭

鬼立衆　色ミの装束　鬼頭巾ナリ　鬼ハはち巻ニ而も　口伝ナリ　五人か七人

目近米骨

シテ　大果報の者天下泰平に治り目出度御代なれハ上ミの御事は申に不及末〳〵ニ至迄存る儘の御正月て御座る　扨毎も一族立江御節申上座ニ御座る御方江ハ嘉例て目近米骨を進上する　身か内に有るヲも無イをも存ぬ　先両人の者を呼出承ふと存る　太郎官者次郎官者居るかヤイ　如常　シ　汝等呼出す別の事て無イ　目出度事ちやナア　太　御意被成る通り御目出度御正月て御座る　次　御目出度事て御座升　シ　扨夫ニ付て毎も一族立へ御節を申上座ニ御座る御方江ハ嘉例て目近米骨を進上する　何と身か内に有か　太　御道具ハ毎〳〵く存て居升か其様ナ物ハ見当ませぬ　次　私も覚ませぬ　シ　汝等か知らすハ無イて有ふ　何と都ニは有ふか　太　何が扨都に何と申事ハ御座りますまい　シ　夫ならハ太儀なから都へ登て目近米骨を求て来イ　太　畏て御座る　シ　扨壹人遣しても調ふ事なれ共念を入よふ為しや　両人共に行ケ　両人　心得升た　シ　太郎官者ハ目近か次郎官者ハ米骨を求て来イ　太　畏て御座る　次　心得升た　如常　太　扨、急な御用ヲ仰付られた事ちやナア　次　乍去いつ迚もわつさりと被仰るニ依て御奉公か仕よい事ちや　太　其通りちやイザ行ふ　サア〳〵来さしませ　次　心得た　太　某ハ今度都初而ぢや程に序なから爰かしこをも見物致ふと思ふ事ちや　身共も初而ちや程に言合せて見物しやふそ　太　イヤ何角言内に都ちや　ト言テ太郎下へ次郎上へ居　次　ハヽア賑合かな事ちやナア　太　某共の在所と

ハ違ふて家なとも奇麗ナ事てハ無イか　次　其通りちや　太　扨汝は目近米骨を知て居るか　次　身共ハ知らねとも汝か心易御請を申タに依て知て居ると思ふて尋すに来た　太　身共ハ終に見た事も無か定而そちか知て居よふと思ふて居た　次　是ハ先何とした物て有ふそ　太　されハ何とか能ふそ　太　ハア流石に都ちや　売買ふ者も呼われは物事調ふと見へた　何と此当から呼わつて行まいか　次　一段と能ふ　太　某ハ目近を尋ふ　次　身共ハ米骨を尋ふ（太郎見付柱江尋る　次郎ハワキ柱江尋る）　太　シ、申そこもとに目近ハ御座らぬか　次　米骨か求とふ御座る　太　目近買ふ　次　米骨ハ御座らぬか（タカイニ入違ニ　タツヌル）　ア　是ハ洛中に住居する心の直に無者て御座る　あれへ田舎者と見へて何やらわつはと申　ちときやつにたつさわつて見よふと存ル　のふ〳〵（ト言テ　行ク）　太　此方の事て御座るか　ア　いかにも其方達の事ちや　海道一はい何をわつはとおしやる　太　田舎者て御座れハりやうしハ申さぬ　真平御免なれ　次　御免なれ　ア　イヤ〳〵りやうしをおしやれと言てハ無イ　若シ事に寄たらは叶ふてもおましやうかと言事ちや　太　夫ハ忝ふ御さる　某共ハ目近米骨か求たさに此様に呼つて歩行事て御座る　ア　扨其目近米骨を知てお居遣るか　太　是ハ都人共覚へませぬ　存せぬに依てケ様に呼て歩行升る　ア　夫は身共かあやまりちや　扨ミ其方達ハ仕合ナ人ちや　太　仕合と申ても斯見へた通りの者て御さる（両人袖ヲ　持見せる）　ア　イヤ〳〵其様に袖妻に付た仕合てハ無イ　某に出合たか仕合と言事ちや　太　此方に逢ふたか仕合とハ何とした事て御座る　ア　不審尤しや　洛中に人多いとハ言へとも其方達の御尋にやる目近米骨屋ハ某壹人ておりやる　太　すれは身共ハ仕合な者て御座る　左右あらは急て見せて被下　ア　いかにも心得た　先米骨から見せふ　先夫に待しませ　太　先目近から見せて被下　ア　いかにも貳色ともに見せふ程に夫に待しませ　両人　心得ました　ア　田舎者をうまん〳〵とたはかつては御座れ共何と目近米骨ちやと申て売て遣ふ物も無ゐ　イヤ思ひ付た爰に古イ扇か有る是を目近米骨ちやと言て売て遣ふと存ル（ト言テ笛座ヘ　入持出ル）　太　何と一段の人に逢ふたてハ無ゐか　次　其通しや　ア　サア〳〵見さしませ　次　とれ〳〵これへ被下（ト言テ　トル）　ア　心得た　次　是ハ入ませぬ　其米骨を見せて被下（ト言テ　差出ス）　ア　子細を御知やらぬに依ての事ちや　其中に米骨か有る　次　トハ何とした

事て御座る　ア　されハの事しや　唐土日本の汐境にちくらか沖と言て有る　此所に峯越の田と言て是にはゑた米を壹ツボまけハ万ツボに成　二つほまけハ貳万つほニなる　其米を此扇へこめたに依て米ほねておりやる　次　成程尤な事て御座る　太　其目近も見せて被下　ア　心得た（ト言テ常ノ扇を太郎か目ノ際ヘヤル太郎目ヲ引ク）　太　是ハ何とさします　イヤそつ共気遣ひナ事てハ無ゐ　何方へ遣るゝと有てもケ様に問近ふ遣るに依て目近ておりやる　太　尤な事て御座る　扨代物ハいか程て御座る　ア　両方共に五百疋ておりやる　太　夫ハ余り高直て御さる　最そつとまけて被下　次　負て被下　ア　イヤ〳〵目近米骨に限てまけハ無イ　いやならハおかしませ　太　夫ならは求ませう　次　いかにも求ませう　太　是へ被下　ア　心得た　太　代物ハ三條の大黒屋て渡しませう　ア　大黒屋存て居る　あれて請取ておりやろふ　両人　最こふ参る　ア　是〳〵　両人　ハア　太　何て御さる　ア　そなた衆ハ余りいさぎ能買人ちやに依て土産をおませう　太　夫ハ忝ふ御さる　次　忝ふ御さる　とれ〳〵是へ被下　ア　イヤ〳〵其様ニ渡ス物てハ無イ　見れは主持と見へた　主と言ハ機嫌のよい時も有り亦悪い時も有物ちや其時は早速御機嫌の直る噺子物を教て遣ふと言事ちや　太　夫ハ忝ふ御座る　教て被下　次　教て被下　ア　教へておましやう　是へ寄らしませ　両人　心得ました（ト言テ両人寄首ヲカタケキクウリ人サヽヤク）　ア　とさへおしやれは早速御機嫌か直る事ちや　太　いかにも覚ました　次　忝ふ御さる　両人　扨最ふこふ参る　ア　お行きやるか　両人　ハア　太　のふ〳〵嬉しや〳〵急て行ふ　サア〳〵来さしませ　次　心得た　太　一段の目近を求た　頼ふ御方に御目に懸たらは御悦被成るて有ふ　次　某も能い米骨を求た　悦敷い事ちや　太　イヤ何かと言内に　戻た　次　其通ちや　太　先是ハ爰に置て　次　夫か能ろふ（二人共太鼓座におく）　太　頼ふた御方御座り升か　ア　イヤ両人の者か戻たそふな　如常　両人　只今帰りました　ア　ヤレ〳〵早つた　して両人共に求て来たか　一段之米骨を求て参り升た　ア　夫ハ出来た　見せい　次　心得ました　さらは御ろふせられませ　ア　ト　レ〳〵（と言テ手ニトル）　ア　汝都て北野へ参てをくまを頂イて来たか　是ハ入らぬ　其米骨を見せい（ト言テ次らへ返ス）　次　扨ハ此方にも米骨を御存御座らぬと見へました　唐土日本の汐境にちくらか沖と申所に峯越と言ふ田か御座る　此所に

出来た米を一ト粒まけハ万粒になり貳粒まけハ貳万つほニ成まする　其米を此内ニこめて御座るニ依て米骨て御座る

ベ　扨は己ハ都てぬかれてうせおつたナ　次　イヤぬかれてハ参りませぬ　ベ　またぬかしおる　己か様ナ愚鈍な者ハ重而の為ちや　言て聞せう　先米骨と言は扇の事ちやわゐヤイ　譬て言へは十本の骨を十五本も廿本ニもこめたのをこそ込骨とも言ふつれ　何そや其扇に紙なとをはそふたとて込骨て有ふ事ハ　次　ても都の者か米骨ちやと申てうりました　ベ　売ハ迚買ふてうすると言ふ事か有る物か　次　亦此方も扇ならハ扇と仰られたよふ(ママ)御座る　ベ　また其つれをぬかしをる　またそこに居おるか　あちへうせい　扨ミにくい奴の（ト言テタ、キヲイヤルシテ柱まて行）　太　次郎官者ハぬかれて失せおつたさふに御さり升る　ベ　其目近を見せい　ベ　畏て御さる　先夫に御待被成ませ（ト言テ扇持出主の目ノ先へ扇を出ス）　ベ　是ハ何とする何とするそいやい　太　ハアそつ共御気遣い御座りませぬ　何方へ被遣ると有てもケ様に間近ふ被遣るに依て是か目近て御座ると申升た　ベ　是ハ如何事　己もぬかれてうせおつた　太　イヤぬかれてハ参りませぬ　ベ　またぬかしおる　目近と言も扇の事ちやわいやい　常の扇よりハ要を近ふ打たをこそ目近共言へ何そや古扇を求て目近て有ふ事ハ　亦扇ならハ扇と被仰たか能御座る　ベ　また其つれをぬかし居る　あちへうせふ　しさりをろふ〳〵　にくい奴の（ト言テ笛座ノ上ヘスウ〳〵と来てトンと下に居る末広同断）　次　持て参たの　太　売人が一人ちやもの某もぬかれいてハ　次　先以の外の御機嫌しや　何とした物て有ふそ　太　されハ何とか能ふそ　太　イヤ思ひ出した　流石ハ都の者しや　ぬかハ只もぬかいて御機嫌之直る噺子物を教へてくれた　ア、何とやらて有たか　次　されハ何とやら言たか　太　千石の米骨　次　万石の米骨　太　目近ニ持て参ツた　両人　是〳〵御覧候へ　実にもさありやよかりもそふよのと言事て有た　太　千石の米骨　次　万石の米骨　両人　目近ニ持て参ツた　次　如何ニも其通ちや　先早ふはやさしませ（はし懸りにて）　是ミ御覧候へ　実にもさありやよかりもそふよの〳〵（何へんもハヤス也二度めヨリ拍子二人共末広ノ如くウイテ笑テ）　まい　ベ　いかにや〳〵太郎官者も次郎官者も能ふきけ　両人　夫ミ御声ちや〳〵（ト言テ二人共ニハヤシヤメル）　ベ　ぬかれたハ悪けれと噺子物か面白い　先ツ内へ入て鯲の鮓をホほふばつて諸白を呑やれ（ト下ニ居テ扇ニ而舞台をタ、キカタヌク）　両人　目近ニ

持て参りた　是〳〵御覧候へ　シ　兎角の事は入まい　内へ入て餅喰へ　両人　是〳〵御覧候へ　けにもさありや
よかりもそふヨノ〳〵　アトシヤキリ　如常

水掛聟

シテ　是ハ此辺に住居する百姓て御座る　此中ハ殊の外照り続くに依て田畑ともに水か無ふて難儀を致ス　先田へ見
舞ふと存ル　誠に百姓程隙の無い者ハ御座らぬ　乍去今年の様に出来れハ何程骨を折てもさのみ心労ニも思わぬ事ち
や　イヤ何角言内に田へ来た　ハ、ア、との田も〳〵よふ成たハ今年ハ稲のいきおいかよい　ハアこちの田ニ水かな
い　はていな事の　されハこそあぜか切落いてある　どふよくな事かな　憐の田ちやと言て余所の田てハない舅の田
ちや　よもや此様な事をしてハ置れまい　内との者の仕業て有ふ　イヤサラハ先ツあぜをついで水をとめよふ　能時
分に見付た　油断のなる事てハ無イ　一段と能い　さらハ是から畑へ参ふ　シテ　中入　舅　当所に住居する百姓て御さ
る　今日ハ田を見舞ふ　先急て参ろふ　誠に此中ハてり続くに仍て気ノ毒しや此上に一ト雨降れは十分の世の中で御
座る　何卒降らせたい事ちや　イヤ是ちや　扨〳〵との田も〳〵能成た事ちや　中ニもこちの田ハ猶能出来たよふな
ハア田に水か無い　又水口を留ハせぬかの　是ハ如何事　是ハ又聟か留メたと見へた　兎角上から来る水をせいて置
中〳〵の事しや　さらはあせを切落ふ　油断のならぬ事ちやハ、ア、行ハ〳〵　見て居る内に生〳〵と成るよふな
此やうな時ハ油断かならぬ　先ツ是へ寄て居て番の致ふ　笛座へ行立て居テモ　下ニ居てもよし　シ　のふ〳〵急か敷や〳〵　畑を仕
モふた　又是から田へ参ふ　百姓程骨折な者ハ無イ　畑へ行かと思へは田へ参ねはならすいそ□い事しや　イヤ水
か行渡たかの　ハア又あぜか切落□てある　扨〳〵腹の立　我人こふ有たい物て人の田にはかまわす我よいよふに斗
りせらるゝ　作法も知らぬ人ちや　舅　能ふ〳〵誰れ気毒に御出やったよ　シ　ヱイ出させられたか　舅　此

中ハ逢ぬか今年ハ何方も世の中か能さそふて一段ておりやる　シ　言わせらるゝ通り悦敷い事ちや　ヒ　とり分け其方の田ハ見事ちや　シ　此方も田も見事て御座る　ヒ　此中ハてり続くに依て水か無ふて難儀しやのふ　シ　此上にひと雨降れは十分の世の中て御座る　ヒ　夫ニ付て日外も天乞の相談か有たが何んと済たそ　シ　誠にこなたハ出させられなんたか何が一在所之者共か集た者ちやニ依て一方からハ角力にせいと言升　又一方からハ踊にせいと言ふて埒か明ませなんたれは地頭殿の言わせらるゝハ日外も踊をおとつたれは早速雨か降た程に踊にせいとおしやつて極り升た　ヒ　誠に地頭とのハ覚かよい日外も踊を踊たれハ早速雨か降て御りやる　シ　夫故若か者か踊ふと言ふて何か拵ると思わせられ　ヒ　ヤア是〳〵　シ　ヤア　ヒ　夫は何とおしやる　シ　あぜを直し升　ヒ　フム扨は此中誰かこちの田の水口をふさくと思へはお主がふさくの　シ　是ハ迷惑な事を言わせらるゝ　某ハ此方の田の水口をふさきわ致さぬ　こちの田の水を留メ升　ヒ　ヤアラ其方ハ聞へぬ　親子の中て言ふもいな物しやと思ふて今迄ハ言わなんたかこちの田に水か無くハ其方の田の水を成とも入てくりやふ人かこちの田□□水を留さしますとハ何とした事ちや　シ　身□社中分か有れ共堪忍致たれ親ならハこちの田のよいよふにさせられてこそ親共言わりやふすれ此少い水をヤ、ともすれハあせを切て取らせらるゝ　こなたへ水を取らせらるれはこちの田か枯升ス　ヒ　天下の田の水を我儘にハ成まい　兎角上ミから来る水ハ下へ取るか作法ちや　シ　人の田を枯いて我田を能するか天下の作法か　兎角此あせハ身共か田に付たあせちや程に切らする事ハ成ぬそ　ヒ　いかにあせハそちのあせて有ふ共水を留メさする事ハ　シ　心得ぬ事をいわし升ス　そつともあせを切らする事ハならぬそ　ヒ　いかに言共切らいて置ふか　シ　イヤ〳〵切する事ハならぬ　ヒ　左右有ハ爰から入れよふ　シ　思いも寄らぬ事ちや　ヒ　イヤのふこりや身共に水をかけたの　シ　無理な事をおしやる程に懸りもせいては　ヒ　あんに言度イ事を言ふ　更ハ身共もかくるそ　シ　のを〳〵身共ハけがに懸たか其方ハ無理におかきやるの　ヒ　けかに懸たもむりに懸たも同し事ちや　シ　何けかにかけたも無理に懸たも同し事しや　ヒ　ヲヽ扨　シ　左右有ハ身共もかくるそ　ヒ　こりや何とする　シ　無んとゝ言事か有物か　二人共シカ〳〵　ヒ　是ハ如何事

扨〳〵悪ひやつの（女楽屋より一ノ松へ出て）　女ヤア〳〵何んと言ふそ　こちの人□とミ様と水論を召ると言か　扨〳〵訳も無い事しや　先あれへ往て様子を見よふ　のふ〳〵気遣いやの〳〵　申〳〵是ハ何とした事て御さる　ベ何んと、言事か有物か　此少ない水を舅かあせを切て□依ての事ちや　舅ヤア是〳〵おなわそふ□イそや　天下の田の水を誰か我儘にするに依ての事しや　懸レ〳〵　女心得ました　ベ己貳度ひ我家へ帰ふと思ふなかゝれ〳〵　舅某にかゝつたれは内へハよせぬそ　かゝれ〳〵　女是ハ迷惑な事しや　ベ扨〳〵にくいやつの　舅己何としてくりやふそ　ベおのれにまけて居よふか　舅扨〳〵にくい奴の　女是ハ何としやふそ　ベヤイ〳〵お主は水を懸い　身共ハどろをかくるそ　女シカ〳〵　舅扨〳〵腹の立　何としてくりやうそ　ベエイ腹の立　女とも足を持て〳〵　女心得ました　ベマアこふして置たがよい　舅是ハ如何な事　ベちよつと来ゐ〳〵　女心得ました〳〵　舅ヤイ〳〵〳〵そこなやつ　女何て御さる　舅己親を此様にしおつて祭りにハ呼ぬそよ　女呼れいても大事ない　舅悪ひ事をぬかす　己ら何んとしてくりやうぞ　ちよつと来イ〳〵

聟　半上下　鋤持ツ
舅　〃　同断　鋤持ツ
女　如常

鞍馬参り

主是ハ此辺りの者て御座る　夜前ハ初寅なれは鞍馬への参詣ハ夥敷い事て有た　それに付て太郎官者を呼出し申

付る事か御さる（呼出如常）　主　汝呼出ス別の事て無イ　夜前ハ初寅なれハ鞍馬への参詣ハ夥敷い事てハなかつたか
太シテ　御意被成る通り夜前ハ大勢の参りて御さり升た　ア　それに付て夜前夜半の頃ても有ふか汝か声て何やら
わつはと言たか何んて有た　シ　私ハ何も申ハ致ませぬ　ア　イヤ〳〵慥ニ汝か声て有たそよ　シ　夜前ハ大
勢の参りて御座つたに仍て定而余人の声をお聞違へ被成た物て哉御座りませう　ア　イヤ〳〵幼少より召仕汝か声
を聞違ふ様ハ無い　つゝます共有様ニ言へ　シ　扨ハ御聞被成ましたか　ア　ヲヽ扨聞た　シ　何を隠しま
やうそ　夜前夜半の頃ても御座ろふか八十斗りの老僧の紅の衣に紅のけさ皆すいせうの珠数をつまくり鳩の杖にすか
らせられて汝年月主の供をして歩行をはこぶ事誠に神妙に思召れ当被下ふ御福なれ共何角御延引被成て只今こそ被下
るれと有て福ありのみを頂戴いたしました　ア　それハ汝へ被下たか　シ　左様て御座る　ア　先ツ夫に待て
シ　畏て御さる　ア　扨〳〵合点の行ぬ事しや　迚も被下る御福なれハ某へ被下そふな物をアノしんこふもない
太郎官者へ被下た　なんとした物て有ふそ　イヤ思ひ付た　面白おかしう申て此方へ取ふと存ル　ヤイ〳〵　シ
ハア　ア　夜前此方ニも目出度御れいむを蒙た　シ　夫ハ如何様な事て御座り升る　ア　様子ハ大方汝に似た
様な事しや　夜前夜半の頃ても有ふか八十斗りの老僧の紅の衣に紅のけさ皆すいせうの珠数をつまくり鳩の杖にすか
らせられて汝年月歩行をはこぶ事誠に神妙に思召れとふ被下ふ御福なれ共何角御延引被成て今レ只こそ被下れと有て
福ありのみを頂戴た　シ　夫ハ御目出度存升　ア　直に渡ふすれ共幸ひ太郎官者を召連たゆへ渡し置　帰たらは
うけとれと被仰た　そちの御福と有のわ某のしや急て渡せ　シ　是ハ迷惑に存升ス此方の貰せられた御福ハ此方の
是ハ又私か貰ひました御福て御さるニ依て進する事ハ成ませぬ　ア　でも多門天の御意ハそむかれまいそよ
シ　何程被仰ても進る事ハ成ませぬ　ア　よふおりやる　扨ハ実正御渡しやるまいか　シ　ア、先為待られイ
ア　待とハ何と　シ　進しませう　ア　そふのふて叶わぬ事ちや　急ひて渡せ　シ　心得ました—
シ　扨〳〵迷惑な事しや　アノ様に言わるゝに仍て不進にハ置れまいとても渡スならハ色〳〵となふつて渡ふと存
ル　申〳〵　ア　何しや　シ　重て多門天の御意を御聞被成升たか　ア　イヽヤ何をも知らぬ　シ　若人に

福をわたさは福渡しと言をして渡せ　さなくハナ渡せそと仰られ升た　ア夫ハ六ヶ敷事か　シ別に六ヶ敷事も御座りませぬか私か鞍馬の大悲多門天の御福を主殿へ参らせたりや参らせたと申さは此方ハたはつたりやたはつたりと被仰る分の事て御さる　ア夫ハ心安イ事ちや　其様に言ふて請取程に急て渡せ　シ畏て御さる　鞍馬の大悲多門天の御福を主殿に参せたりや参らせた　アシテ夫ハいつころ言事しや　シ置てあさつてあたり被仰ませ　アそふ言ふハ遅と言事か　シ遅い共何とも被申た事てハ御座りませぬ　ア左右あらハ今度ハ早ふ請とろふ程に最一度渡せ　シ心得ました　くらまの大悲多門天の御福を主殿ニ参らせたりや〳〵　たはつた〳〵　シヱ、かしましい　其様に被仰て何と御福か渡る物て御さろふ　左右杯てしつかに請取らせらるゝ事ハ成ませぬか　ア左右あらハしつかに請取ふ　最壹度渡せ　シ畏て御さる　鞍馬の大悲多門天の御福を主殿に参らせたりや〳〵　アたはつたりやたはつた　サア渡せ　シ夫ハ余りおそふ御さる　最前のはやいと只今の遅いとの間を左右に拍子杯てしん上に請取せらるゝ事て成ませぬか　ア拍子ハ身共か得て居る　拍子に懸て請取ふ　最一度渡せ　シ心得ました―　アくら馬の大悲多門天の御福を主殿に参せたりや〳〵　アたはつたりやたはつた　シフシ多門天の御福を主殿に参せたりや参らせた　アたはつたりやたはつた　シ参らせた　アたはつた　シ参らせた　アたはつた　シハア、と被仰ませ　アハア、　シ最一声　アハア、　シ申目出度事か御さる　アたはつた　シハア、　アハア、　シ夫ハ如何様な事ちや　シ只今の御福ハ此方の御蔵へとふと納て御さる　アハア、　シ夫こそ目出度けれ　居て休め　アエイ　シハア

鶏聟

ア是は此辺りの者て御さる　今日ハ才上吉日なれハ　聟殿か見ゆる筈ちや　先太郎官者を呼出し　申付ふと存ル

如常　ヘ　汝呼出ス別の事て無イ　今日ハ才上吉日なれハ聟殿か見ゆる筈ちや　見へたらは此方に言へ　ヘ　畏て御さる　ヘ　ヱイ　ヘ　ハア　聟シテ　ヘ　是ハ舅にかわゆからるゝ花聟て御さる　今日ハ才上吉日なれハ聟入を致よふにと申て参た　又聟入にハ様〳〵しき作方の有物しやと申　某ハ生付て物毎不調法に御さる　又爰に誰殿と申て物毎御功者な御方かござる　是江参り敷作法を習イ直に聟入を致ふと存ル　誠に此様ナ事と存シたらは前広から心懸れは能た物を今と成て後悔致ス事ちや　アノ誰殿が日頃御念比に被成て被下るによつて定而教て被下ぬと言ふ事ハ御座るまい　イヤ何角言内に是ちや　物申案内申　ヘ　イヤ表に案内か有　案内とハ誰そ　シテ　ヘ　某て御座る　ヘ　ヱイ誰よふ社おりやつたれ先ツハ奇麗な出立ておりやる　シテ　ヘ　何と〳〵〳〵よふ御座ろふかの　ヘ　是へ来初而から終に見ぬ奇麗な出立ちやか様子ばしおりやるか　ヘ　奇麗ナ社道理なれ　私ハ今日聟入を致升ス　ヘ　ヤレ〳〵夫は目出度イ事ておりやる　其様な事と知たらは前広から用をも聞ふ物ヲ　ヘ　夫故今日ハ御無心に参升た　ヘ　夫ハ何事ておりやる　ヘ　聟入にハ様〳〵敷作法の有物ちやと申　私ハ又御存之通何にをも存ませぬ　又此方ハ節ミ聟入を被成て能ふ御存て御座ろふ　何卒敷作法を教て被下りやふならは忝ふ存ましやう　ヘ　イヤ爰な人か　人聞わるい　節ミ聟入をすると言事か有物か　ヘ　御隠被成な　私か参る度毎にけふハ舅の方へ行翌日も行と被仰るかあれハ聟入てハ御座らぬか　ヘ　夫ハ其方か御しやらぬに依てちや　始て舅の方行を聟入と言其後行をお里見舞と言物ておりやる　ヘ　存せぬ事迚不調法を申て面目も御さらぬ　何卒敷作法ヲ教へて被下りやふならハ忝存ませふ　ヘ　某も其様な事ハそらてハ覚へぬ　物の端に書て置た　見ておませう　先夫に御待ちれ（ママ）　ヘ　夫ハ難有ふ存升ス　ヘ　扨ミ世にハうつけた奴も有物ちや　聟入をするに何の六ヶ敷事か有ふ　あの様なうつけた者にハ後〳〵迄笑草に成るよふに教て遣ふと存ル　ノヲ〳〵御座るか　ヘ　是に居升る　ヘ　書た物を見ておりやるか大昔中昔当世様と言て有　どの聟入を教へておませうそ　ヘ　先以て忝ふ御座る　大昔ハ余り古ふ御座る　中昔もむかし也　物毎当世様と申に依而当世やうの聟いりを教て被下りやふならハ忝ふ御さる　ヘ　其方ハ聟いりをおしやるに付て分別迄か上つておりやる　ヘ　御はつかしう存升ス　ヘ　扨其方ハ鶏のけよふ所を知

てお居やか(ママ)　シ子供の時分にすきて御座つて度〻鶏のけよふ所を見てよふ存て居り升　ア それハ一段ちや
あれへ御行きやつたらハ鶏のけよふ真似をする事ておりやる　シ其分て苦敷う御座り升るか　ア そふさへ御
しやれハ聟殿ニハさ法知りちやと言ふて舅か大分嬉事ておりやる　シ夫ハ忝ふ存升　左様ならハ最こふ参り升る
ア ア、是〳〵　シ ハア　ア 其方の処に烏帽子か有まい　爰に鶏のトサカニ似た烏帽子か有　借してお
ませうそへ　寄らしませ　シ夫ハ難有ふ存升ス　ア こふして行事ておりやる　シ舅か大分引出物を用意
致されたと承りました　帰にハおすそ分ケを致て御さろふ　ア 必すそ〻分を待てあらふそ　シ よふ御座り升
か　ア よふおりやる　あれへ御出やレ　シ心得ました　何んとて御さる　ア ヲ、よい聟ふりておりやる
シ 忝ふ存升る　左様ならは最ふこふ参り升る　ア 御行きやるか　シ ハア　ア よふおりやつた
シ ハア―　シ なふ〳〵嬉敷や〳〵　先急て参ろふ　誠に聟入にハ窓からも垣からも目斗りちやと申か某ハ当
世様の聟入を習ふて行からハそつともおくする事てハ無い　イヤ何角言内に是ちや　先案内を乞ふ　物申案内申
太 イヤ表に案内か有　案内ハ誰そ　シ そちハ是の太郎官者か　太 左様て御さる　此方ハ殿方て御さる
シ 聟か来たと言へ　太 畏而御座る　申上升　舅 何事しや　太 聟様の御出て御さる　舅 何聟か見
へたと言か　太 左様て御さる　舅 こう御通り被成れいと言へ　太 畏て御さる　コヲ御通り被成いと申さ
れ升る　シ 心得た　諷　聟わ舅の家に行き〳〵御座敷迄ハれき〳〵なり迎か〻りの元にそ立たりけり―　シ
クミクこきやア〳〵〳〵　舅 笑―　ア 聟殿にハ何をせらる〻事ちやいナア　太 されハ何を被成まするそ
舅 聟とのニハ理千儀な人と聞た　誰そなふつてお起した物て有ふ　聟の恥ハ舅の恥ちや　某もあの様にせつハ成
まい　必笑ふナ　太 心得ました　舅 是へ寄て手伝ふてくれゐ　太 畏て御さる　舅諷 舅ハ是を見るより
も〳〵聟の仕□におとらしと広ふ椽より飛んて下り羽た〻きをしてこそ立たりける　両人 ク、、、こきやア
ク、、、　シ 爰ハ所も替りなれは(かゝり)(ニニ)　地 柳桜を追廻し松ハ元よりときわなれハ紅葉にまごふとさ懸られて叶わしと舅
ハ内に入ぬれハ　シ 聟ハ聟入しすまして　地 〳〵勝時作て帰りけり　シ こつきやコヲ

竹生嶋参り

ア　是ハ此あたりの者て御さる　某召仕ふ下人かいとまをもこわす何方へやら参て御座る　又承れハ夜前罷り帰つたと。ハ申せ共未タ某へ目見へを致さぬ　今日ハきやつか私宅江立越へ急度せつかんの致ふと存ル　悪ひ奴て御さる　暇をも乞ふて御さらハいか程をも遣ふ物をしのふて参た所か言語同断腹の立事ちや　イヤ何角言内にきやつか私宅ハ是ちや　某が声と聞知たらハ留守をつかふてあらふ　作り声を致し呼出そふと存ル　物申案内申　シテ　やら気とくや夜前罷り帰つたを早殿方やら御存有て表に案内か有　案内ハ誰そ　ア　物申　シ　殿方て御座る　ア　しさりおろ　シ　ハア　ア　俄のいんきんめいわく致ス　ちと御手を上られい　シ　ハア　ア　扨〳〵悪い奴の此中ハ誰に暇を乞ふて何方へいて有そ　シ　されハ其事て御さる　壹人召遣せらるゝ下人の事て御座れハ御暇の儀申上たり共叶ふましいと存てしのふて竹生嶋参りを致しました　ア　やら珍ら敷や　一人召遣ふ下人か竹生嶋へ参詣すれハ主に暇をも乞ぬほふてすか　シ　ハア　ア　ヱイ　シ　ハア　ア　急度せつかんのしやうと思ふて是迄ハ立越てあれ共竹生嶋へ参詣したとあらハ天ぶくのおそれも有　此度ハゆるす　そこを立　シ　夫ハ誠て御座るか　ア　誠ちや　シ　実正て御さるか　ア　弓矢八幡介るそ　シ　ヤラ心易や　ア　何と今迄ハとのよふに有た　シ　毎もの御気色とハかわらせられてすハ御手討ニも被成るゝ事かと存て身の毛をつめて居り升た　ア　嘸左右て有ふ　身も毎もより腹か立た　此度ハゆるす　已来をたしなめ　シ　畏て御さる　ア　何と竹生嶋参りハ賑合かな事か　シ　何か扨天下納た御代て御座れハあなたこなたの参り下向ふハ夥敷い事て御さる　ア　左右て有ふ　何んそ珍敷事ハ無かつたか　シ　別に珍ら敷事も御座りませなんたか私か雀とからすハ別の鳥かと存ておりましたかあれは親子そふに御さる　ア　とハ何とした事ちや　シ　参る道に大木か御さる　かた枝ニハ雀又片枝にハからすかとまつて居まして雀かチ、イ〳〵と申て御されハ烏ハ子かア〳〵と申て御さる　あれハう

たかいもない親子そふにこさる　ア　それハ汝か知らぬに依てちや　同し木に泊て鳴合すると言ふ物て親子てハ無いゝやい　シ　私ハ又親子かと存ました　ア　して外に何そ珍敷事ハ無つたか　シ　外に珍敷事も御さりませなんたか　イヤ思ひ出しました　ア　何とちや　シ　神前の片原に広い芝か御さる　それにこひた物か寄集て居ました　ア　夫ハ何か寄合ふて居た　シ　先ツ辰　犬　猿　蛙　口縄杯か集て居り升た　ア　先ハ合点か行ぬ世に中の悪ひ者を申と犬とのよふなと言に何そ中の悪そふな躰ハ無かつたか　シ　中の悪ひ事ハ置せられ何そきやつらか相談事と見へまして銘〻の立所に秀句を言てたちました　ア　夫ハ何と言ふた　シ　先辰て御座る　ア　辰か言たか　シ　私ハ諸用御座るに仍て此場を辰出スと申ました　ア　何ちや辰出ス　シ　左様て御さる　ア　辰出ス〳〵〳〵笑　辰の秀句に辰出すハ出来いたナア　シ　出かしました　ア　して何ちや　シ　何ちやいぬる犬て御さる　ア　犬ハ何と言た　シ　私ハ夜咄しに参る二依て此場をいぬる出スと申升た　ア　何ちやいぬる出ス　シ　左様て御さる　ア　犬る出ス〳〵〳〵笑　犬の秀句に犬る出スハ出来いたナア　シ　出かしました　ア　して何ちや　シ　申て御さる　ア　きやつハ嘸言たて有ふ　シ　私ハ内客を得ました二依て此場を去ル出スと申升た　ア　又くわいた笑　きやつは人間半分の智恵をもつたと言ふに依て秀句ハ言かきやつか所への内客ハ誰て有ふナア　シ　誰て御座りませうそ　ア　して何ちや　シ　蛙て御さる　ア　きやつも言たか　シ　殿方も〳〵御立被成て御座も淋敷成ましたに依て此場をかへるですと申ました　ア　何ちやかへるてす　シ　左様て御さる　ア　かへるてす〳〵〳〵笑　きやつか少イ目をしよぼ〳〵させて蛙出スハ出来いたナア　シ　是も出来しました　ア　して何ちや　シ　最ふ何も御座りませぬ　ア　また何やら有たそよ　シ　最ふ何も御座りませぬ　ア　イヽヤ先辰犬申かへる口縄かまたちや　シ　誠に口縄かまたて御さる　ア　口縄ハ何と言た　シ　先夫に御待被成ませ　ア　心得た　シ　是ハ如何事　頼ふた御方の御機嫌の直そふと思ふて人の咄しを申て御座れハ口縄の秀句にはつたとつまつた　是ハ先何とした物て有ふそ　ア　ヤイ〳〵　シ　ハア　ア　口縄の秀句を言ぬかいやい　シ　口縄て御座るか　ア　中〳〵　シ　口縄ハ私ハ諸用御座るに依て此場

を辰出スと申ました　ア何ちや辰出ス　シ中〳〵　ア辰出ス〳〵〳〵笑　口縄の秀句に辰出ス　それハ辰の秀句ちや　口縄のを言へ　シエヽ口縄て御座るか　ア中〳〵　シ私ハ夜咄に参るに依而此場を犬る出スと申ました　ア犬る出ス〳〵〳〵笑　口縄の秀句にいぬる出ス　イヤ〳〵是ハ犬の秀句ちや口縄のを言へ　シ申出ス　ア・それハ申ちや　シ蛙る出ス　ア扨は実正おしやるまいか　シア、先お待被成ませ　ア・待とハ何と　シ口縄ハ物と申升た　ア何と　シ物と　ア何と　シ先くるり〳〵と輪に成て鎌首をもつ立石蔵の間へぬら〳〵出スと申升た　ア何ても無イ事しさりおろ　シハア　ア・ハア　シエイ

蝸牛

シテ　是ハ出羽の国羽黒山の山伏テス　某今度大峯葛城江分入只今本山へ罷帰る　先そろり〳〵と参ふ　誠に国元を立て日数をへた事なれハ路銭のたくわへも無イよふに成た　道すから観勤を致て成共参ふと存る　イヤ此当迄来たれハ殊の外草臥た　幸爰に大きな藪か有　此藪影に休ふて参ふと存る　ヱイ〳〵〳〵ア、草臥ヤノ〳〵　主是ハ此当りの者て御座る　某大父子様を持て御座るか久ミの御病気て持ての外の事ちや　色〳〵とすれ共御本服被成ぬ　又ある人の申ハ蝸牛を持ゆれハ早速御本服被成るとの事ちや　先太郎官者を呼出し蝸牛を取に遣ふと存ル　主如常　主汝呼出ス別の事てない　そちも知る通り大叔父子様の御病気も久ミの事てハ無イか　太御意被成る通り久ミの御事て御さり升　主夫ニ付て又有人の申ハ蝸牛を用ゆれハ早速御本服被成るとの御事ちや　汝ハ太儀なから蝸牛を行て取て来い　太畏てハ御座り升るか私ハ終に其蝸牛と申ハ見た事も御座り升せぬ　主不知ハ教へて遣ふ　先頭の黒イ角の有こしに貝を付て居る物ちや　又藪影抔ニハ大分居る物ちや程に急て取て来イ　左左様な

らハ畏て御さる　主　急て往てやかて戻れ　太　ハア　主　ヱイ　太　ハア扨〳〵迷惑な事を被仰付た　先急て参ろふ　誠に大叔父子様の御病気も久〻の事て御気毒ちや　去りなから蝸牛を用ゆれハ早速御本服被成るて御座ろふ　イヤ何角言内に大キな藪へ有た　藪影抔には大分居る物ちやと被仰た　気を付て見よふ　此辺りに蝸牛ハ居らぬか知らぬ　何れに居る事ちや知らぬ　イヤあれに何者やらねて居る　先蝸牛てハ無イかの　見れハ頭が黒ひか　イヤ越して見よふ　ノヲ〳〵〳〵そこな人　ウ、、、能寝た事哉〳〵　太　のふそこな人　ヱミイこちの事か　太　如何にも其方の事ちや　其方ハ何として是に寝て居さします　某ハ往来の者ちやか草臥て寝て居る　お主ハ藪主か　太　藪主てハ無イか若シ其方ハ蝸牛てハ無イか　何ちや蝸牛て無イか　太　中〳〵　先夫に御待ちよれ　太　心得ました　是ハ如何事　うつけた事を言　あの様な者ハたばかつてあたへを取て路銭に致そふと存ル　のふ〳〵御居やるか　太　是に居り升　いかにも某ハ蝸牛ちやか何そ用か有か　太　されハ其事ちや　某の頼ふた御方大叔父子様を為持れた　久〻御病気なれとも未タ御本服被成れぬ又有人の申ハ蝸牛を用ゆれハ早速御本服被成るとの御事ちや　夫故蝸牛を取に来た　又藪影抔にハ大分居る物ちやと被仰れたに依て尋る事ておりやる　又腰に貝のある物ちやと被仰れたか貝かあるか　如何にも貝か有　見せておませう　太　見せて被下　それお見やれ　太　誠に貝か有　又折節ハ角を出ス物ちやと被仰れたか角か有か　何ちや角か　太　中〳〵　先夫に待て　太　心得升た　是ハ如何事　此角にハほふとこまつた　何とした物て有ふそ　イヤ思ひ付た　致様か有　のふ〳〵角を見せふ　太　見せて被下　なんと〳〵　太　成程　なんと角かあろふかな　太　如何様角が御座る　すれハ疑ひも無イ蝸牛ちや　何と来て被下りやうか　如何にも行ふか某か様な蝸牛ハまれなに(ママ)に依てあたへを大分取らねは行ぬか夫ハ合点か　太　来て被下るゝならハあたへハ如何程も進上う　左右有ハ行ふか只行もいな物ちやに依て何そはやし物をして行度か何と有ふ　太　是ハ一段と能御座ろふ　左右有ハ某かでん〳〵虫〳〵といわハこなたハ拍子に懸つて雨も風も吹ぬに出さかま打割ふ抔と言ふてはやしておくりやれ　太　先そふ言ふて拍子いて見さしませ

ベ　心得た　サア〳〵噺子ぞ〳〵　太　はやさせられい　ベ　てん〳〵虫〳〵〳〵　太　雨も風も吹ぬに出さ
釜打わろふ〳〵　ベ　てん〳〵虫〳〵〳〵　一へん廻ルうちに主出て口伝あり　主　太郎官者ヲ蝸牛取に遣して御さるか何と致たやら
帰りかおそい　見に参らふと存ル　されハこそあれへ来る　ヤイ〳〵太郎官者　太　ヱイ頼ふた御方　主　そち
ハ何をして居る　太　私ハ蝸牛を連て参り升る　主　夫ハとれに居るそ　太　あれに居り升る　主　イヤ爰
な者か　あれハ山伏ちや　ベ　ヤイ〳〵はやさぬかいやい〳〵　太　心得ました　ベ　虫〳〵　太　雨も風
も吹ぬに出ざ釜打わろ〳〵　ベ　てん〳〵むし〳〵〳〵　主　ヤイ太郎官者　太　ハア　主　あれハそちを
たはかつて行人かいて有ふ　某か能いよふに致よふかある　そちハ是へ寄て居よ　太　心得ました　主　ヤイ
〳〵〳〵そこなやつ　ベ　何ちや　主　そちハ某の太郎官者をたはかつて行人かいちやナア　ベ　何しや人か
いちや　主　中〳〵　ベ　何んの人かいて有ふ　てん〳〵虫〳〵　主　こりや何とする　ベ　てん〳〵虫〳〵
ベ　主　何んとする　ベ　てん〳〵虫〳〵　主　是ハ如何事　太　雨も風も吹ぬに出さ釜打わろふ〳〵
ベ　てん〳〵虫〳〵てん〳〵むし〳〵　ウキなから三人楽屋へ入ル色〳〵口伝有り